

---

# 竹林奇譚 第一話 選択した行く末に待つもの

すばる & ぴの子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竹林奇譚 第一話 選択した行く末に待つもの

### 【Nコード】

N36170

### 【作者名】

すばる&ぴの子

### 【あらすじ】

裕福な家に生まれた明華。

だが、彼女は両親に反発し、家を飛び出す。

こんな世界なんてきらい。

こんな現実なんてきらい。

こんな家族なんてきらい。

こんな…自分なんてきらい……。

彼女は目指す。

強い願いをもった者だけがたどり着けるといふ場所を。  
そこに住まう仙人に願いをかなえてもらうために。

## 第1章

強い願いを持つ者だけが行き着ける場所。

そこには不老不死の仙人が住んでいるという。

彼は「大切なもの」と引き換えに、1つだけ願いをかなえてくれる。

もしそれが真実だとしたら、あなたは 何を願う？

日が暮れて、路地裏には暗闇が迫ってきていた。

明華は頭の両脇できれいに結っていた髪を解くと、わざとぼさぼさになるように手ぐしですいた。そうして、泥を少しばかり顔に塗る。少しでもみすばらしく見えるようにするために。

> i 3 8 4 0 1 — 4 8 0 8 <

けれど、これがどれほど無意味なことかは、今年十になったばかりの明華ミンファでも十分にわかっていた。

こんなことをしたって見る者が見れば、明華だということはすぐにわかってしまうだろう。

一緒にいる者たちの中では、どう見たって浮いているのだ、明華は。

つやのある美しい黒髪。真白なきれいな肌。

これだけでも、明華が恵まれた環境にいることはわかる。つやのある髪は手入れが行き届いている証拠。真白な肌は普段から外にでて仕事をせずともよい身分である証拠。

明華が着ている服も上質の絹でできたものだった。春に咲く桃の花のような色をした服には、金の糸で見事な刺繍も施されている。

それだけで、彼女が誰かは、この町に住むものならば、すぐにわかるだろう。

このような格好をしていられるのは、よほどの金持ちでなければ

できぬのだから。そして、この町でそれができるのは、限られた者だけだ。

役所に勤める上級の官吏。あるいは町でも有数の商家の者。

明華の場合は後者だった。

蘭家といえ、知らぬ者などいないほどだ。

そんな家の娘が何をしているのかと言うと

「いいな、今日はあそこの通りを狙う。行くぞ」

「わかった」

数名の少年たちがばらばらと動き出した。

彼らは店が軒を連ねる通りへと数名単位で散っていった。

「おれたちも行くぞ」

一人の少年に促されて、明華は二人の少年と一緒に一軒の食料品を売る店の前へと歩み寄っていった。

「いいな、おれが店のオヤジの気を引き付けておくから、お前ら、その間にきちんとして盗めよ」

明華より若干年上の十二、三に見える少年が、前を見据えたまま明華ともう一人の少年に告げた。こくりと二人は頷く。

彼らの身なりは、明華に比べればずっと粗末なものだった。

少年たちがどのような家の者なのか、明華は知らなかった。それどころか名前すら知らない。だが、町で彼らが盗みを働いている現場に出くわしてからは、彼らに頼み込んでこうして時折盗みに加えてもらっていた。

彼らはその日を生きたために盗みを行っている、しかし、明華は金に困っているわけでも、その日食べるものに事欠いているわけでもなかった。

明華は通りの先をじつと見つめた。

この通りのずっと先に明華の家はある。

立派な壁に囲まれ、美しい装飾が施された門が自慢の建物。十以上の部屋があり、どの部屋にも見事な調度品が備え付けられている。誰もが羨むほどの裕福な家。

(でも、わたしは……)

「おい」

背をたたかれてはつとなる。

「大丈夫か、姉ちゃん？」

「なんでもない」

愛想のない明華の答えに、どう見ても明華より年下の少年は、こばかにしたように小さくフンと鼻で笑った。

「しくじるんじゃないぞ」

明華はそれには答えずに、標的としている店へと近づいていった。

「なー、おっさん」

年長の少年が店の主人に話しかけた。

「なんだ坊主。何を買いにきた？」

下っ腹が大きく出た主人は、他の客の相手をしながら少年をちらりと見やる。

ちょうど夕暮れ時ということもあり、店に並ぶ食品のうち、日持ちがしないようなものは、若干値が下げられる。それを狙って買いに来る者たちも多く、主人はその対応に忙しそうだった。

「あのさ、おれ、昨日このあたりで財布を落としたんだよね。見なかった？」

「財布？ どんなのだ」

「青地の袋なんだけどな」

ふうん、と主人は首をかしげる。

「見た覚えがないなあ。いくら入ってたんだ」

「ちよつと額が大きくてね。金で……」

少年は手を右手を広げる。庶民が数ヶ月は生きていけるだけの額だ。

「そんなに？」

胡散臭そうに少年を見やる。少年の格好はとてもではないが、それだけの額を手に行けるような者には見えなかったのだ。

「届け物でね……。見つからないと、おれ……」

「おい、泣くな、泣くな」

店の主人はおるか、その場にいた客たちの注目も、突然泣き出したおとりの少年に向けられている。

それを見ると、若い少年は行動に移した。

すつと軒先に並べられたたくさんの桃の中から二つを手にとると、そのうちひとつだけをすり袖の中に隠す。

あまりにもあつという間のできごとで、誰も気づかない。少年は何ごとのなかったかのように桃をもとあつた場所にゆっくりと置く。呆れてしまうほどの、あまりにも鮮やかな手腕。

明華も少年と同様の方法で、いくつかの菓子を袖の中に隠した。

やはり、誰も気づかない。

隣では少年が次から次へと袖の中に隠していく。

なんて簡単なのだろう。そして、なんて愚かなのだろう。店の主人も客も。こんな単純な方法に騙されてしまうなんて。

（わたしも愚かだけど）

心の中に闇が広がっていく。

明華はちらりと主人を見ると、当初から計画していたことを実行に移すことにした。

なんと、隠し持っていた菓子を地面にぶちまけたのだ。

あたりの空気が一瞬凍りついたのがわかった。すべての客の視線が自分に注がれているのがわかる。

「？」

店の主人は、ここにきて明華の顔に気づき、あつと小さな叫び声をあげた。

「逃げろ！」

ほぼ同時に少年二人がいつせいに走り出す。明華も少年たちの後から走り出した。

「待て！」

店の主人が追ってくる。

だが、普段から走ることになど慣れていない明華は、あつという

間に少年たちにおいていかれた。諦めたように明華は走る速度を落とす。だが、彼らは自分たちが逃げることで精一杯で明華のことなど気づきもしない。

彼らの姿が見えなくなった頃、ようやく店の主人がおいつき、明華の腕をつかんだ。

「明華嬢ちゃん、あなたはいったい何をしたいんです」

「……」

ぜえぜえと息を切らし、汗をぬぐいながら主人は強い口調で明華を責めた。だが、明華は黙ったまま何も答えなかった。

「とにかく一緒に来てもらいますよ」

抵抗もせずに、明華は腕を引かれるまま、主人に従う。

「ったく、うちで盗みなんかしなくても、ご両親に頼めば手に入らないものなんてないでしょうに」

店についた明華は、奥にあるいすに腰掛けさせられた。主人はぶつぶつと文句をいいつつも、明華を丁重に扱った。

いつもこうして盗みをはたらいては捕まり、そのたびに店の主人から愚痴を言われる。その繰り返しだった。が、明華は決して盗みをやめようとはしなかった。

「で、仲間の名前を教えてくださいませんか？」

「知らないわ」

明華の言葉に、店の主人は眉をひそめる。

「知らない、ってこたあないでしょう。仲間なんじゃ？」

「仲間なんかじゃないわよ。盗みをするっていうから加えてもらっただけだもの」

主人は怪訝そうに問うた。

「前は別のところでしたそうじゃないですか。そんなときは仲間とは違うんで？」

「だと思っわよ。その前に仲間じゃないけど」

「仲間だからってかばってるんじゃないでしょうね？」

「それでわたしに何の利益があるの？」



淡々と答える明華を見て、本当に彼女が何も知らないと考えを改めたようで、主人は呆れたように大仰に息をついた。

「とにかく、蘭家のだんな様に来ていただくまで、ここにいてもらいます」

そうして、このことはすぐに両親に知れるところとなり、半刻もしないうちに父親がすつとんでやってきた。

父は明華の汚れた姿を見ると、言葉を失ったが、すぐに気を取り直すと、店の主人の前で頭を下げた。

「困るんですよ。面白半分でやられちゃ。明華嬢ちゃんにとっては遊びだったとしても、こちらは生活がかかっているんでね」

店の主人の言葉に、父は侘びだと言って懐から小さな布袋を取り出した。

> i38402—4808 <

主人はそれを見て、困ったように顔をしかめた。

「そんなことしないでください。あとで周りから何を言われるかわかったもんじゃない」

主人は袋の中身が何かを察して、袋を父に押し返した。

「金で解決しようなんて思わないでください。そういう問題じゃない」

「本当に申し訳ない」

再度父は深く頭を下げるのを見て、今日何度目かのため息を主人はついた。

「あなたにそこまで言われたら、こっちは何も言えないじゃないか。

今後は気をつけてくださいよ」

本当に、頼みます、と再度主人は念を押ししたのであった。

「部屋で反省していなさい」

家に戻るなり、明華は自室に追いやられた。

明華は黙って父を睨む。

「まったく、なぜおまえはそうなんだ」

不機嫌そうに大きく息を吐く父。そんな父を、背後で心配そうに見ている母。そう、「見ている」だけ。決して母は父に逆らうようなことはしない。

明華に味方してくれることはない……。

明華の中でどろどろとした気持ち広がっていった。

「なぜそうやって私や母さんに恥をかかせるような真似をするんだ。毎度、毎度。これで一体何度目だと思っている」

また比べられる　明華は思った。

また弟と比較される。

優秀な弟と。

出来ない自分はどんなに頑張ったって弟のようにできない。

どんなに努力したって、弟には敵わない。弟は常に明華より上を行く。

「まったく少しはあの子を見習ったらどうだ。今日だって……」

明華の中で、何かが切れる音がした。

「わたしなんて、わたしなんてあのコに比べてどうせできない娘よ

！　わたしなんていららないでしょ！」

思わず叫ぶ。

両親は凍りついたようにそ、の場から動かない。

だが、やがて父がゆっくりと明華に近づいてきたかと思うと、左手をあげた。

鋭い痛みが明華の左頬に走った。

「あなた！」

我に返った母が父の左腕を掴む。

明華は啞然として、その場に佇んだ。

「　おまえには何も言っても無駄なんだな。　わかった」

父は低く告げた。

「あなた！」

去っていく父の背中に、母が叫んだ。

「明華、さあ、お父様に謝って。ね？」

「放っておいて」

差し出した母の手をはたいた。

「明華……」

「わたしのことなんてどうでもいいって思っているのに、優しくしないで！ 放っておいて！」

「明華、聞いて！」

「出ていって！」

母も部屋から追い出すと、明華は扉をバタンと乱暴に閉じた。

そのまま明かりもつけずに、寝台に腰掛けると、窓から見える月を仰いだ。

雲ひとつない空に、浮かぶ満月。

見ているだけで、寂しさを覚える。

こんなにも明るい光を放っているのに。

自分はなぜここにいるのだろう。

感じずにはいられない孤独感。

やがて、母屋から、両親と弟の笑い声が聞こえてきた。

その中にいられない自分は何なのだろう。

部屋へと漏れ入る月の光は、とても冷たい。

ますます自分が孤独であることを思い知らされる。

「月なんてきれいよ」

小さくつぶやく。

こんな世界なんてきれいよ。

こんな現実なんてきれいよ。

こんな家族なんてきれいよ。

こんな自分なんて……きれいよ……。

その夜、明華はこっそりと家を抜け出すことを決意した。

前から考えてはいたことだったが、今夜それを実行に移すときが

きたのだと思った。

明華の目的はただ一つ。

仙人に会うこと。

この町を出て日が昇る方向に進んだ場所に住むという仙人の話を耳にしたのは、いつだったか。

噂と笑うには、あまりにも真実味を帯びた内容で、町の誰もがこの話を信じていた。

強い願いを持った者だけがたどり着くことができる場所がある。

そこに住まうという仙人は何でも願いを叶えてくれる。実際に、王都には仙人に願いを叶えてもらったという人もいるのだと。

それが嘘か真かはわからなかったが、明華はその仙人に会うべきだと考えた。

今のこの状態から抜け出すためにはそれしかないと思った。

話に聞く場所がどこなのかは、はっきりとは知らない。

だが、このような話が流れるということは、過去に行ったことがある人がいる、ということに違いない。

ならば、噂通り日が昇る方向に進めばたどり着けるはずだ。

みなが寝静まったころ、明華は普段は立ち入ることを禁じられている部屋へと、こっそり忍び込んだ。

そうして、金庫に隠されていた金のうち、半分ばかりをそっと小さな袋に詰め込む。

(これだけあれば……)

明華はきゅつと下唇をかみ締めた。

夜明け前には荷物を詰めた袋を背負い、裏口から抜け出した。

そのまま 町と外とを隔てる門の傍らまで来ると、物陰に隠れてじつと夜が明けるのを待った。

本当だったら一刻も早く町から出たかった。いつ家の者が気づくとも知れない。

見つかったら、それこそ叱られるだけではすまないだろう。

その前に、この町を出なければ。

けれど、高くて厚い城壁がめぐらされているこの町を出るためには、守衛がいる門を通り抜けなければならぬ。

こんな夜も明けぬときに門を開けてくれることは不可能に近かつたし、万が一開けてもらえたとしても、守衛に余計な印象を残すことになってしまっただろう。

それではだめなのだ。

自分がどこへ姿を消したのか決して悟られないためにも、明華はこっそりとこの町を出たかった。

夜が明ければ、日没までに町に入ることができなかつた者、金がなく野宿をするしかなく、町の外で過ごさざるを得なかつた者たちが、一斉に町の中へ入ってくる。

門は大きく開放され、日没まで閉じられることはない。

町の中を出入りするのに、旅券を検められることはあるが、万が一不審に思われて旅券を出すように言われても、町の者だとわかればそれほど執拗に問い尋ねられることもないだろう。

一日のうちで最も人が門に殺到する時間ならば、旅券の検査は甘くなる。そうでなくとも、明華が住むこの悠春は商業都市として栄えているため、この時間帯の商人の出入りは激しい。

町に住む商人たちは隣の町へ向けて出発をする。外で一晩を過ごした商人たちは一斉に町の中へ入ってくる。

その中に紛れればすんなり外へ出ることは可能だろう。

(早く、早く……)

願うように空を見上げる。

家を出るときは星がちらほらと見えていた空も、今では美しい朝焼けに染まっている。それはまるで真白な布の上に橙色の塗料をさつと薄く敷いたようだった。

人の気配を感じて物陰から顔を出すと、門の前にちらほらと人々が集まりだしていた。大きな荷車を引いている者、馬車に乗っている者、馬に乗っている者、明華と同じように小さな袋だけを背負っている者。みな、これから次の町を目指して行くのだろう。

人々が集まりだしたということは、門の開く時間が迫ってきている証だ。

だが、明華は物陰から出ようとはしなかった。今、下手に姿を現せば、知っている者に出会わないとは限らない。そうでなくても、明華はこの町で比較的顔が知られているほうだ。蘭家の娘として。

明華はじつと門が開くのを待った。

それから半時ほどした後。

ようやく門が開く。

大きな木の門は二人の守衛によって、ゆっくりと開かれた。すでに門の外には数十人の者が待っていた。

門が開けられると同時に、中からそして外から人々が動き出す。

明華は頃合を見計らって、外へと出て行く人々の群れの中に紛れこんだ。

守衛の横をうつむき加減に足早に通り抜け、門がずっと後方になったとき、明華はようやく歩みを緩めた。

どっと疲れが押し寄せる。

だが、それと同時に今まで感じたことがない開放感が身体いっばいに広がっていった。

明華は生まれてこの方、悠春から出たことがなかった。出る必要がなかった、というほうが正しいかもしれない。

父は商売の関係で、他の町へ行くこともあったが、それは明華には関係のないことだった。

城壁に囲まれた町が、明華にとって世界のすべてだったのだ。

(これで仙人さまに会いにいけるんだわ！)

明華は大きく息を吸った。

この道の先に新しい世界が待っている。自分の願った世界が。

明華は期待に胸を躍らせて、足取りも軽く道を歩み始めたのだ。た。

## 第2章

家を飛び出して七日が過ぎた。

ここまで来て、明華は己の考えが甘かったことを思い知らされた。お金があればどうにでもなると思っていた。

だが、世の中はそんなに簡単ではなかったのだ。

> i38406—4808<

十歳そこそこの子どもが大きすぎる額のお金を持っていることは、世間的に見て、とてもまずいことなのだ、初めて知った。

特に明華が家から持ってきたお金の多くは「金」や「銀」が主だった。しかし、庶民の間ではもっぱら銅銭が流通していた。金や銀は高額すぎてあまり使われていなかったのだ。

店があつても、持っているものを見せたとたん、断られてしまい使えなかった。

宿にいたっては泊めてもらえないという事態だった。

お金をどんなに出すと見せても、胡散臭そうな目で見られ、ある宿では危うく役所まで連れて行かれそうになった。

そんなことになったら、あつという間に身元が割れてしまつたろう。

あの家に戻ることは、今のままではできない。

明華は捕まれた腕を振り切つてその場から逃げ出してことなきを得た。

それ以来、宿に泊まることはあきらめた。

金や銀では買い物すら満足にできないことを知り、わずかな銅銭で干し肉などの食べ物を買ひ、食いつないだ。夜は持ってきた厚手の服を羽織つて大きな木の下で寝るしかなかった。

(こんなのつてない……)

今まで上等の絹の寝床で眠っていた明華にとって、それは屈辱的なことでさえあった。

だが、すべては仙人に会うまでの辛抱だ。

そう言い聞かせて明華は東へ東へと足を進めた。

幾つかの村を通り過ぎたが、仙人の話はやはり不確かで、確たる場所を示す情報は何も得られなかった。

ただ、どこで聞いても

「日が昇る方に」

ということだけは変わらぬものだった。

(お願い……。わたしは……)

どうしても仙人に会わねばならない。

この状況から抜け出すためにも……。

(わたしは会いたいのに)

家を飛び出してから十数日目の夜。

あの時は満月だった月も、すっかり姿を変えてしまい、あいにく  
今晩は朔の日だった。

明華は湖のほとりで一晩を明かすことにした。

近くの村までは数里ばかり離れており、あたりには人っ子一人い  
なかった。

前日までは月が出ていたのと、比較的人家のそばにいたからだろ  
うか、明華はそれまで夜の闇を、負の思いを以って感じたことはな  
かった。

だが、この日は何も灯りが周りにはなかった。

ホウ、ホウと梟の鳴き声がとて不気味に響き渡る。

風が吹くとざわりとゆれる木々。

何かか今にも襲いかかってきそうな雰囲気だった。

明華はぶるりと震えると、耳を押さえて大きな綿織物を頭からか  
ぶった。

せめて人家がある場所にとどまっていればよかった、と己の行動  
を悔いた。

だが、近くの村までは歩いて戻るのも恐ろしかった。

今晚だけ我慢すればと、明華はがたがたと震えながらもその場か



ら動くことはしなかった。

そうするうちにいつしかうとうとし、気づけば眠りに落ちていた。

しかし、夜半、ふと明華は目を覚ました。

一瞬遠くから楽器の音色が聞こえてくるような気がした。

立ち上がってあたりを見回したが、人の気配はない。それどころか灯りすら見えない。

気のせいかと再び腰を下ろそうとした明華の耳に、先ほどよりはつきりと楽器の音が聞こえてきた。

明華はその音に惹かれるように歩き出した。

風に乗って、近くに遠くに音色は聞こえる。

この音はどこから聞こえてくるのだろうか？　どんな人が弾いているのだろうか？

明華はふらりと音に導かれるかのように足を進める。

いつしか気づくとあたりは竹林になっていた。さきほどまでは、竹など一本もないような広葉樹の生い茂る場所にいたはずなのに。

(いつの間に……？)

ざわざわと笹の葉が揺れる。

ホウ、ホウと梟の鳴き声があたりから聞こえてきた。

その声がやけに耳につく。

そういえば、世の中には梟のような妖もいるのだと、聞いたことがある。

一本の足と、猪の尾を持つその妖は山に普段は住んでいるが、時折人々の下へと降りてくるのだと。すると、疫病が流行るのだと

。中には人を襲うものもいるという。

(まさか……)

明華は知らず、歩みを速める。

ここから早く抜け出したくなった。

半分泣きそうになりながらも、明華は確実に楽器の音のもとへと近づいていった。

音色がはつきりと聞こえてくるようになったと感じたそのとき、明華は前方で揺れる小さな明かりを見つけた。

（人がいる！？）

思わず走り出した。

> i38407—4808<

明かりを指して最後の力を振り絞り、駆ける。

やがてその明かりが、一軒の家のものであるとはつきりとわかったとき、明華は一気に気が抜けるのを感じた。

もはや、両足は鉛のように重かった。

だが、その足を気力だけで一步一步前へと進める。

（助けて！）

門の前に来た明華は、声ならぬ言葉を心の中で叫んだ。

それとほぼ同時に門が開いた。

（助け……て……）

赤い髪が視界を過ぎる。が、明華はそのまま深い意識の底へと落ちていった。

「おい、嬢ちゃん」

「いたあい」

ぺしぺしと頬を叩かれ、明華は意識を取り戻した。

「！」

続いて、視界に飛び込んできた男の姿に、頭が真っ白になった。

（誰っ！？）

会ったことも見たこともない男の腕の中に抱えられている自分に気付き、動揺する。

「ぎゃーっ！」

気付いた瞬間、明華は腹の底から悲鳴を上げていた。

「なにごとですか！？」

ばたんと勢いよく戸が開いて、もう一人中から飛び出てきた。

その人は明華を見ると、顔をしかめた。

「何をしたんです、学然<sup>シユエラン</sup>」

「何もしてねえ」

「何もしなかったら、こんな悲鳴を出されるわけないでしょう」

「おまえな……」

おい、と赤髪の男は明華の顔を覗き込む。

「俺は何もしていない。な？」

促されて、思わず頷いてしまった。

「そういうのを脅しというのはなかったでしょうか」

「あいな……」

後から出てきた青年は戸を開け放った。

「とにかく、中に入りませんか。身体が冷えるといけませんから」

「はいよ」

赤髪の青年は、明華を抱えたまま立ち上がった。

「お、おろして！」

ばたばたと両足をばたつかせるが、青年は明華を抱いたままかわずに戸の中へと入っていく。そうして、屋内へ入ると、明華を椅子の上に下ろした。

「捕って食いやしないよ」

「そう見られても文句は言えませんか」

茶器を持って、先ほどの青年が現れた。

「とりあえず、お茶でもいかがですか？」

青年は優雅な仕草で茶を入れ、明華の前においてくれた。

出されたお茶で喉を潤すと、少しだけ心が落ち着いた。

「もう、大丈夫ですか？」

「こくりと頷く。」

「ごめんなさい」

とりあえず、まずは謝っておくことにした。

少なくとも、そうすることが得策のような気がした。ここは家を出て以来、ようやく人家の中に入れたのだから。

住人の機嫌を損ねて追い出されたら、それこそたまらない。

「こちらも召し上がりませんか？」

> i38408—4808<

大きな饅頭が二つ出された。ずいぶんと不恰好な形をした饅頭だった。本当は丸い形に作りたかったのだろうが、いびつな形になってしまっている。しかも、中身の餡がところどころから飛び出してしまっていた。

「残念ながら冷えてしまっただけではありますが、おなかを満たすことではできると思えますよ」

「ありがとうございます……」

冷えている云々より、形のいびつさが気になった明華だったが、そのことはあえて口にはせず、ありがたく饅頭をもらうことにした。穏やかな笑みを向けられ、明華は顔が赤らむ。

先ほどは暗かったためあまりわからなかったが、こうして灯りの下で見た青年を、明華は綺麗な人だと思った。

男性に対してこのような表現が適切かどうかはわからなかったが、一瞬女性かと思ふほどの柔和な顔つきをしていた。

先ほどまで目にしてきたような闇のような黒髪も美しく、滝糸のようにまっすぐで艶も見事だった。

彼は明華の真向かいに腰をおろした。

「私は雲隠<sup>コンイン</sup>。そしてこちらは学然。先ほどは脅かしてしまっただけですみません」

「おい、雲隠。俺はなあ」

「学然」

反論は許さぬ、といったたよすの雲隠に、「学然」と紹介された赤髪の青年はふうと小さく息を吐いた。

「すまねえな、嬢ちゃん」

明華は頭を横に振った。

勝手に大声を出してしまったのは自分だ。驚いたとはいえ、あのよくな悲鳴を上げるとは。

「ごめんなさい」と小声で明華は謝った。

学然は雲隠とは正反対のような印象を受けた。

物静かな雲隠とは異なり、とても活動的なようすに見えた。

真つ赤な髪は、よく見れば前髪に一箇所だけ銀色に染めている箇所があつた。その髪の毛の後頭部でひとつにまとめ上げている。

目つきはよく言えば鋭い。だが言葉を発せず、黙つたままでいれば、おそらくは「目つきが悪い」とも言われかねないかもしれない。

しかし、気さくに話しかけてくる学然は、とても悪い人には見えなかつた。どちらかというところ、雲隠よりは話しやすそうにさえ思えた。

「で、嬢ちゃんの名は？」

雲隠の隣に並んで腰を下ろした学然は、お茶をぐいと飲むと明華に訊ねた。

「明華」

「なぜここに？」

明華は、この質問にはつととなると、二人の顔を見た。

(もしかしたら知っているかもしれない！)

少なくとも、明華よりは詳しい情報を知っているかもしれない。

「願いを叶えてくれるっていう仙人さまを知ってる？」

「願いを叶えてもらいにきたのですか？」

ええ、と大きく頷いた。

「そう…ですか」

雲隠の顔が曇った。

> i38409—4808<

自分は何かいけないことを言ったのだろうか、明華は不安になつた。

ウワサでちらりと聞いただけのこと。人を不快にさせるようなものだったのだろうか。

「どうしても、なのですか？」

「どうしても会いたいの。会ってわたしの願いを叶えてもらわないと、わたし、困るの」

「会っても、願いが叶うとは限らないのではないですか？」

「そんなこと、会ってみなくちゃわからないわ」

真剣な明華の眼差しに、雲隠は小さく息をついた。

明華の考えが変わらぬことを察したのか、雲隠は決心したように、口を開いた。

「では願いを聞きましょう」

明華は、彼が言っていることの意味がすぐにはわからなかった。

なぜ雲隠に自分の願いを教えなくてはいけない？

きよとんとしている明華の姿を見て、学然がいたずらっぽそうに笑った。

「嬢ちゃんの尋ね人は目の前にいるぞ」

学然の言葉と、先ほどの雲隠の言葉が、ここでようやくつながった。

「えーっ!？」

学然にあげたときに劣らないほどの大きな奇声を、明華は発する。

「あなたがウワサの仙人さま？」

信じられなかった。

「だって、仙人さまっておじいさんなんじゃないの？」

仙人といえば、年をとったおじいさんが定番だと信じていた。

> i38410—4808<

だが、目の前の彼はとても若く、多く見積もっても二十台半ばにしか見えない。

明華の頭の中では、書物に描かれているような仙人の姿しかなかった。

長くて真白なあごひげ。少しばかり曲がった背筋。そして好々爺のような笑み。そんな姿をしているものとはかり思っていた。

「残念ながら……」

何故かとても申し訳なさそうに雲隠は言った。

「私もこれでも仙人なのです」

「あなたも？」

学然を見やる。

まさかこんな真つ赤な髪をして、性格も軽そうな感じの男まで仙人なのではないかと思うと、世の中間違っているとしか思えない。

「いや、俺は違うな。仙人じゃないなあ」

学然は鼻の頭をかいた。

それを聞いて少しばかり明華は安堵する。

「じゃ、なんなの？」

「こいつの…しもべ？」

「学然」

雲隠に睨まれ、学然は肩をすくませた。

「ま、ダチってところかな。こいつ、結構危なかったしいやつだからな。ほうつておけないんだ」

深くは気にするな、と学然はからからと笑った。

雲隠は身体の向きを正すと、明華の瞳をじっと見つめた。

「それで、あなたの願いは何ですか？」

明華は雲隠の瞳を見つめ返すと、しっかりとした口調で答えた。

「幸せになりたいの」

「…」

「わたしは幸せになりたいの。あなたがあの仙人さまなら、わたしの願いを叶えてくれるのでしょうか？」

「あなたは今、幸せではないのですか？」

明華は大きく頷いた。

もう痛むはずのない、父にぶたれた左頬に知らず触れていた。

「わたしはいらぬ子だから……」

両親に必要とされたい。そうすれば、自分は今よりずっと幸せになれるに違いない。

雲隠はちらりと学然を見やった。

学然は肩をすくめると、小さく頷いた。

それを見ると、雲隠は立ち上がり、座っていた椅子の後方にある立派な木箱から、一つの封書を取り出ししてきた。

「わかりました。あなたの願い、叶えましょう。ただし……」

「ただつてわけないわよね」

「ええ。それ相応の代償をいただくことになります」

「いいわよ。いくら？」

明華は懐から布袋を出すと、机の上に無造作に置いた。じゃらりと金属の音がした。

家を出るとき、拝借してきた金や銀だ。

今までの旅ではまったく役立たなかつたものだったが、ようやくここで役立つのだと、明華は少しばかり嬉しくなった。

明華は普段、お金を手にする必要がほとんどなかつたから、実際にこの袋の中身がいかほどの価値があるものかは知らない。

だが、町でもそれなりに裕福な暮らしをしていた自分だ。その家から金庫に入っていた金銀の半分以上を持ってきたのだから、それなりの額はあるはずだ。

このようなあばら家に住む者のとつてみれば、十分過ぎる額に違いない。

だが、雲隠はそれを見ると、愁眉を寄せた。

明華はそれを、額が足りないという意味ととつた。願いを叶えてもらうには、少なすぎる額だったのか。こんなことなら金庫入っていたものをすべて持つてくればよかつたと後悔した。

「足りない分はあとで必ず持つてくるわ。それでいいでしょ？」

しかし、雲隠はゆっくりと首を横に振つたのだ。

「なぜ？ 確かに足りないかもしれないけど、あとで持つてくると言っているんだからいいじゃない！」

「お金ではありません」

雲隠の言葉に、明華は目をぱちくりさせた。

「お金じゃない？」

雲隠は袋を明華の手元に押し返す。



「それに、それはあなたのものではない。だから、あなたの願いの代償にはなりません」

「なんで！」

「嬢ちゃん、自分の願いごとを叶えてもらうのに、他人のもので叶えてもらおうってのは、虫が良すぎるってものだ」

そんなことを言われても、自分に差し出せるものは何もない。明華は仕事をしてお金を稼ぐこともしたことがないし、機織などの何か特別な技能を持っているわけでもない。

いつも、望んだものは何でも手に入ったので、技能を身につける必要もなかったのだ。

「大丈夫ですよ。何も特別なものをいただくというわけではありません」

「じゃあ、何をあげればいいの？」

「あなたの一番大切なものです」

「大切な…もの？」

明華はうつむいた。

「大切なもの」といわれても、それが何なのか、今の明華にはまったくわからなかった。

ものあまり執着しない性格だったこともあり、思いつくものは何もなかった。

「わたし、わからないわ。大切なものって言われても」

そう言葉にして、明華は改めて自分が不幸せなのだと感じた。

世の中の人は、明華のことをとても幸せなのだと言う。

この世には、食べることをさえまならぬ者もいるのだというが、食べるものにも、着るものにも不自由しなかった。

上等な絹の服を身にまとい、立派な家にさえ住んでいた。

家に戻れば、多くの下女たちが明華が不自由しないよう、世話をしてくれる。

普通の人であれば、絶対に得ることができない多くのものを、明華は持っていた。

だが、明華にとってはそれは当たり前のことであつたためか、それが幸せなのだと感じたことがなかった。

幸せはそんなことではない。

自分が成長するにつれて、どこかよそよそしくなつていく両親を見るたびに、明華は孤独感を募らせていくようになった。

弟が生まれてからは、自分に向けられるべき愛情までもが、すべて弟に向けられているような気がして、明華は自分の心が捻じ曲がつていくのを感じた。

「わたし、幸せになりたいの……お願い」

「大切なもの」はわからない。だから、求められても差し出すことができない。それでも願いはどうしても叶えてもらいたい。

わがままだとは思つていても、明華は必死で雲隠に訴えかけた。

雲隠は一度ゆっくりと双眸を閉じると、折りたたんであつた紙を広げた。

真っ白で何も書かれていない紙を広げると、雲隠は口を開いた。

「大丈夫。大切なものはわからなくても、願いが叶えばそれと引き換えに自然とあなたのもとから去りますから。あなたはそれを失つても気づくことはありません。もちろん、痛みを感じることもありません」

笑いかける雲隠の言葉に、明華は思わず頷いてしまっていた。

「ああ、それでは取引成立ですね」

雲隠が差し出した紙に、うつすらと文字が浮かんだかと思うと、それはやがてはつきりと墨で書かれたような文字となった。

美しく流れるような文字を目で追うと、そこには明華が願いと引き換えに、彼女の大切なものを雲隠に差し出すことに同意するといふことが書かれていた。いわゆる誓約書だ。

「それでは、この紙に触れていただけますか？」

> i38411—4808<

差し出された紙に明華の指先が触れると同時に、すう、と水に溶けるように、紙は空気中に消えていった。

「これであなたの願いは叶います。近いうちに必ず……」

「本当？ 本当に叶うの？」

わたしは幸せになれるの？と明華は問うた。

雲隠はそれを肯定も否定もせず、ただ笑みを浮かべた。

### 第3章

とりあえず今晚は泊まっていきなさい、と雲隠に勧められ、明華は小さな部屋に案内された。

明華の部屋に比べれば、はるかに質素なつくりではあったが、こうしてみるときちんと整頓された、落ち着いた雰囲気の部屋だった。

> i 3 8 4 1 2 — 4 8 0 8 <  
調度品も、これまた明華の家にあったほどのものではなかったが、どこかしら気品を感じさせるような品々ばかりだ。

棚の上には、見事な刺繍を施した絹織物がかけられている。その上には細長い陶器があり、一輪だけ花が活けられていた。

部屋の中には微かによい香り漂っていた。予め香を焚いておいてくれたのだろう。見れば銀でできた香炉が窓辺に置かれていた。

どれもこれも、おそらくは雲隠の趣味なのであろう。どうみてもあの学然がこれらのものを施したとは思えない。

「わたくしたちは向こうの離れに夜はいますから、何かありましたら声をかけてください」

「ありがとうございます」

出て行く雲隠に声をかける。

振り向いた雲隠は、とても複雑そうな顔をしていた。

「わたくしはお礼を言われるようなことはしていません……。引き換えにいただくものがあるのですから」

「ううん」

明華は首を振る。

「お願いごだけじゃないわ。えーと……」

明華は少しだけ首をかしげて考える。

「助けてもらったから」

「？」

「あなたでしょ？ 楽器を奏でていたのは」

楽の音色が聞こえたからここにたどり着けた。ここに導いてくれたのは雲隠が奏でていた音だ。

「おやすみなさい」

雲隠は小さく笑うと部屋を出て行った。

彼が部屋を出て行ったのを見ると、明華は早速寢床にもぐりこんだ。

なんだか疲れたどつと押し寄せてきた。

家を飛び出してから、「一日」がとても長く感じるが多かったが、今日はその中でも一番長い一日のように思えた。

だが、その「一日」も、今日で最後だ。

明華の願ったことが現実になっているのであれば、明日にでも家に帰ろうと思った。少なくともここにおいても願いは叶わない。

「幸せになりたい」という明華の願いは、家族と共にあって初めて成しえるものだ。

明華の願った「幸せ」。

(わたしの……幸せ……)

ふと、明華は固まった。

自分の「幸せ」は……それは何なのだろう……。

今の自分が幸せでないことは、明華にもわかっていた。だが。

そういえば、自分は「幸せになりたい」と願いはしたが、具体的にどうなりたいのだと思ったことはなかった。

どうなったら、自分は「幸せだ」と思えるのだろう。

(わたしは……)

じつと宙を見る。

ここにきて初めて、漠然とした不安が明華を襲った。

先ほどまでは願いが叶うということに浮かれてはいたが、その願い自体がじつはともあやふやなものだと気付いてしまった。

次に目が覚めたとき、世界はどうなっているのだろう。自分はどうなっているのだろう。「幸せ」になれているのだろうか？ どう

なったら自分は「幸せ」と感じるのだろう。

一瞬、とてもいやなことが脳裏をよぎった。

考えてはいけないことを考えてしまった。

明華はぎゅっと目を閉じ、その考えを打ち払った。

(考えるのは…やめよう……)

このまま眠ってしまえば、考えずにすむ。だが、そう思えば思うほど眠りにつけなかった。

身体は疲れてとてもだるいのに、まったく眠りが訪れてはくれなかった。

何度か寝返りを打っていると、ふと、楽の音が聞こえてきた。その音色は、紛れもなく、明華がここにやってくるときに耳にしたものだった。

ゆったりとした優しい曲。伸びやかな音色。

明華は小さな欠伸をした。

そうして、気づくと、明華は眠りに落ちていた。

眠りの中で、明華は一人、暗闇の中に立っていた。

(ここは……どこ?)

あたりを見回したが、何もなかった。

どこまでも闇だけが続いている。

樹も草も、何もなかった。

そこにはただ明華が立っていることで「地」と感じるものしかなかった。

その場で立ち尽くしているわけにも行かず、明華はその中をゆっくりと歩みだした。

どちらが前かもわからぬ中、手探りをしながら一步一步前へ恐々と進む。

そのような状態でしばらく進んだところで、明華はふと、前方に灯りを見つけた。

じつと目を凝らしていると、その灯りが一気に明華の目前まで近づいてきた。

灯りはまるで大きな透明な玉のような中にはいつているようで、見えないものに阻まれ、明華はその灯りに触れることも、そしてその玉の中に入ることもできなかつた。

明華が立つ位置は常に影。暗闇が背後には控えていた。

「ねえ、お姉ちゃんはどこに行ったの？」

聞き覚えのある声が光の中からした。

はつとなつて明華は目を凝らす。

「！」

光の中には両親と弟がいた。

「お姉ちゃんはいつ帰ってくるの？」

「もう、戻ってこないのよ……」

母が優しく弟の頭をなでる。

（わたしはここよ！）

明華は叫んだが、それは彼らには決して届かなかつた。

「そうなんだ。でも大丈夫だよ。お姉ちゃんがいなくても、ぼくが

ちゃんとお母さんとお父さんを助けてあげるから」

「心強い言葉だな」

父の満面の笑み。明華には決して向けられることのないものだ。

（わたしは……）

ばんと見えない壁を叩く。

「あの子のことは忘れよう。私たちはお前がいれば幸せなのだから」

ふふふ、と無邪気に笑う弟を、父は強く抱きしめた。

見たくない。

もうこれ以上、この光景を目にしていたくはなかつた。

明華はぎゅっと目を閉じ、耳を両手で覆った。

光が急速に引いて行くのを感じた。しかし、それは一瞬のことで、再びまぶしすぎるほどの光が周りにあふれるのを感じた。

そろそろと目を開けると、雑踏の中、明華は一人立ち尽くしてい

た。

人々は光の下を忙しそうに行き交う。

だが、明華が立つその場所だけ、ぼつかりと闇が口を開けていた。  
見て。

誰か、わたしを見て。

だが、誰も明華には気づかない。

どうして、どうして……どうして誰も気づいてくれない……。

涙があふれてきた。

黒いものが心の中からあふれてくる。

いつそのこと、全部消えてしまったらしいのに。

そうしたら、わたしは苦しまなくてすむ……。

そう思ったとたん、足元の闇がぶわりと明華を包み込んだ。

(な……に……)

息ができない。

苦しい、苦しい。

明華はもがいた。

助けて！ 誰か助けて！

叫んでも、誰も来てはくれなかった。

暗闇の中で、明華は必死にもがいた。

誰でもいい！ 誰でも！

(ひとりはいやなの！)

だが、明華の声を拾ってくれる者は誰もいなかった。

(どうして……誰も助けてくれないの！)

誰か、誰か……お願い……！

「明華、明華……」

目を開けると、心配そうに自分を覗き込む雲隠の顔がぼんやりと  
見えた。

「！」



瞬間、明華はぐつと両手胸を押さえた。息が……できない。胸が苦しい。

「明華？」

声の方に右手を伸ばす。

苦しい、苦しい、助けて！

声に出したくとも出せない。

「雲隠、どけ！」

次の瞬間、強い力にぐいと引き寄せられた。

「嬢ちゃん、ゆっくりと息を吸え」

(息…息……)

息の吸い方……。

「ゆっくりでいい。口を開けて」

ああ、そうだ。口を開けて……。

明華の身体の中に新鮮な空気が入ってきた。

それとほぼ同時に、明華は激しく咳き込んだ。

「水、飲めるか？」

渡された器を受け取り、明華はそろそろと口の中に流し込む。

「大丈夫ですか？」

雲隠に問われて、こくりと頷く。

「雲隠、嬢ちゃんをちよつと頼む」

「あ、はい」

学然は言い残して部屋から出ていった。

「わたし……」

言葉を発しようとして、明華は再び激しく咳き込む。

「明華、無理をしないで下さい」

明華の背中をさすりながら、雲隠は心配そうに言った。

「ずいぶんとうなされていたみたいですが、大丈夫ですか」

「うなされ……て……」

明華の脳裏に先ほどまで見ていたものがよみがえってきた。

「……」

ぐつと強くした唇をかむ。

> i 3 8 4 1 3 — 4 8 0 8 <

「明華？」

「わたしは……」

「？」

「幸せに……なれるの……よね？」

「明華……」

「願いは、叶えてくれるのよね？」

「待った、嬢ちゃん。先にこつちだ」

声がるほうに目を向けると、姿を消した学然が、なにやら器を持って現れた。

「まずはこつち。これを飲んでおいてくれ」

不審そうな瞳を向ける明華に、学然は苦笑した。

「妙なもんじゃねえよ。薬だ。よく……眠れるように、な」

「……」

「苦くはねえよ」

ためらう明華に、学然は肩をすくめる。

「嬢ちゃん用だからな」

明華はくんくんと匂いをかいでみた。少なくとも、過去に飲んだことがある薬特有の匂いはしない。

舌で少しだけ舐めてみた。

「……」

「な、苦くないだろ？」

こくりとうなずく。

学然が言うとおり、それはまったく苦味を感じないものだった。

逆にほんのりと甘い。明華はこくりと一気に飲み干した。

「あなたは夢鏡……を見たのですね」

明華が落ち着いたのを見計らって、雲隠が話しかけた。

「夢……鏡……？」

「自分が最も見たくないもの、自分が最も見たいもの。人の思いが

強いと、それは夢に現れるものなのです。とくにこの庵ではそれが強く働くのですよ。あなたには悪いほうに作用したようですね」

夢は明華の心の投影なのだと、雲隠は教えてくれた。

本当であれば、その夢をもとに未来を紐解くことも可能なのだと。

「じゃあ、私の未来は？」

雲隠は困ったように首を傾げた。

「残念ながら私には…わかりません」

「仙人さまなのにわからないの？」

「すみません……」

本当に申し訳なさそうに謝るものだから、こちらが悪いことをしているような気になってしまう。

「私は 未熟な仙人なのです…私は……」

「雲隠」

パンと学然が、雲隠の目の前で手を打った。

「あ、ああ……」

「お前、また悪いほうに考えているぞ。嬢ちゃんが困っている」

目をしばたかせている明華を見やり、苦笑する。

それを見て、雲隠はまた申し訳なさそうに少しうつむいた。

「申し訳ありません、明華……」

わたくしは、と言いかけた雲隠の言葉を、学然が遮った。

「はい、そこでおしまい。それ以上、今は言うなよ。また同じことの繰り返しになる」

学然の言いようを見て、先ほどまでの鬱な気分など忘れて、思わず明華はふきだした。

「？」

「わたし、仙人さまってもっとすごい人だとばかり思ってたわ」

「 明華……」

なんとも複雑そうな顔をしている雲隠の横で、学然はけらけらと笑っている。

「 学然、笑いすぎです。ああ……すみません……。少しばかり長

居をしてしまいましたね」

雲隠は窓の外に目をやった。

まだ外は暗く、夜明けまでは間がありそうだった。

「もう一眠りしたほうがいいですよ。薬も飲みましたし、今度はゆっくり眠れるでしょうから」

これでも学然は薬の調合がうまいのだと、雲隠は明華の前髪を梳きながら言った。

「これでもってのが気になるけどな。次に目が覚めたときは朝だ、つてくらいは眠れるはずだ」

にかつと学然は笑う。

「二人ともごめんなさい」

「？」

不思議そうに二人は明華を見た。

だが、やがて明華が何を謝っているのかを悟り、微笑んだ。

「嬢ちゃん、そういうときはな、謝るんじゃないかって礼を言うんだよ。そのほうが言うもほうも言われたほうも、気持ちがよくなるだろ？」

明華はこくりと頷く。

「二人とも、ありがとう」

気にしないでいいと、二人は優しく言ってくれた。

「それではおやすみなさい」

「じゃあな」

各々立ち上がると、部屋を出て行こうした。

「待って！」

明華は二人を思わず呼び止める。

学然と雲隠は驚いたように振り返った。

「お願い………眠るまで、そばに………いて」

最後のほうは消え入りそうな声で言う。

雲隠と学然はお互い顔を見合わせたが、ふっと笑った。

「ええ。それではあなたが眠るまでそばにいきましょう」

雲隠は戻ってくると、明華の手を握ってくれた。学然も枕元に浅

く腰掛けると、明華の頭をなでてくれた。

二人の手はとても暖かく、明華の心に安らぎをあたえてくれるか  
のようだった。

そうして、いつしか明華はゆっくりと眠りに落ちていった。

今度は夢など見なかった。

「雲隠……嬢ちゃんは……」

雲隠は外で揺れている竹に目をやる。

「夢鏡のせいだけじゃないような気がする。おまえは何を知っている？ あれは……」

「やはり……。わたくしは…無力です」

ざあと風に揺られて、竹の葉が鳴る。

二人はしばらく外で揺れる竹を見つめていた。ただじつと……。

## 第4章

翌日、明華は起きた後も、なかなか部屋から出ようとはしなかった。

心配した学然が昼すぎになって、部屋を訪れた。

「嬢ちゃん、飯はどうだ？」

「うん……」

明華は小さくうなずいたが、床に腰掛けたまま、動こうとはしなかった。

「な、嬢ちゃん」

「……」

「まずは飯を食ったほうがいい。腹をすかしたまんまだと、ろくなこと考えねえ。腹をいっぱいにしないと脳も動かないんだと」

「そう……ね……」

やはり明華は床から動こうとはしなかった。

「ほら」

明華は視界が大きく揺れるのを感じた。

「！」

軽々と学然に抱きかかえられ、明華は抵抗する隙も与えられずに、そのまま母屋へと連れて行かれた。

そうして昨日と同じように椅子に座らされた。

卓の上にはすでに食事が用意されていた。

小さな饅頭が三つ。そして茸が入った湯。

ずいぶんと質素なものだった。町にいたころの食事に比べれば。

けれど、旅の間はこのようなものでさえ口にできなかつたのだから、今の明華にとっては十分過ぎるほどのご馳走だ。

「さ、まずは食うんだな。俺はな、料理はやっぱり冷えないうちに食ってもらいたい」

有無を言わさない学然の様子に、明華は頷くしかなかった。

「いただきます」

饅頭を二つに割ると、中には細かく刻んだ葱がぎっしりと入っていた。てっきり肉が入っているかと思つた明華は、思わず学然に目をやった。

「悪いな。肉はだめなんだ」

「？」

「いちおう、あいつ、仙人なの」

忘れてるだろ、と学然に言われて、明華はああ、と思ひ出す。

そういえば以前どこかで聞いた気がする。仙人さまは肉類を食してはだめなのだ。

「物足りないかもしれねえけど、おいしいと思うぞ」

促されて、かぶりと饅頭にかぶりつく。

思っていた以上に、饅頭の皮には甘みがあつた。中の餡代わりの葱は少ししょっぱく味付けされており、甘みとしょっぱさのバランスがとてもよくできていた。

「学然は食べたの？」

目の前でお茶をすすっている学然を見て、明華は訊ねた。

「ん。まあな」

「雲隠も？」

「ああ、すまねえが先に食べさせてもらった」

遅くまで出てこなかったのは明華なのに、学然は謝る。

「いいの？ わたしに付き合つてこんなところで油うつていて」

「別に油なんかうつてねえって。こつやつて嬢ちゃんが食事しているのをそばで見守るのが、今の俺の仕事なの」

「へんなの」

くすくすと明華は笑つた。

「そうだろ？ 一人じゃ、うまいもんもつまかないからな。食事つてのは一人でするもんじゃない」

「そつ……？」

明華の顔が曇る。

「家ではこうやって食わないのか？」

彼女の手が止まった。

「あまり…ないわね」

父も母も仕事が忙しく、家族そろって食事をするなどほとんどなかった。

かといって、弟と共に食べるのは何となくいやで、明華はいつも部屋で食事を取るようになっていた。

下女が運んでくれる食事を部屋の前で受け取って。

はじめのうちは、あれこれと下女たちが世話を焼こうとして、部屋の中まで押しかけてきたが、鬱陶しくなつて追い出してしまった。

それ以来、明華はいつも一人で食事を取っている。ただ黙々と。

だから、今、このように学然と話ながら食事をしていることが、とても新鮮だった。もう何年間もした覚えがなかったから。

ぼんぼんと、明華の頭を学然が叩く。

「？」

「あまりしょいこまないことだな」

「何を？」

「いろんなものを、だ」

「わからないわ」

いいんだよ、わからなければ、と学然は小さく笑った。

明華はぱくりと饅頭の最後の一口を口の中に放り込んだ。

「ご馳走さま」

「お粗末さま」

料理自体はとても質素なものではあったけれど、家で食べていたどんな豪華な料理よりも、とてもおいしく感じた。そして何よりも、ちよっぴり気持ちが高揚した。

それはやはり、こうしてそばに人がいてくれたからなのかもしれない。

「学然……」

明華が食べ終えた皿を運んでいこうとする彼の背中に、明華は声



をかけた。

「ん？」

「　　あり……がとう……」

「いんや」

部屋を出る間に、彼は明華のほうに向き直った。

「次はちゃんとみんなで食おうな。そのほうが何倍もつまいぞ」

明華は満面の笑みでうなずいた。

食事を終えた明華は庭に出ると、庭先にあった椅子に腰掛けて空を見上げた。

薄雲がかかった空は、まるで今の明華の心のようにだ。

今にも雨が降り出しそうな不安定な空　　。

「帰らないのですか？」

声をかけられ振り向くと、そこには雲隠が立っていた。

雲隠は明華が今まで見上げていた空を仰いだ。

「今ここを出れば、日が落ちる前に家にたどり着けますよ」

雲隠は西の方角を指差した。

「一度つながった道ですから、帰るのは至極楽なはずですよ。ここを

抜ければ、あなたが住んでいた町まですぐですよ、きっと」

だが明華はそこから動こうとはしなかった。

「帰りたくないの」

「帰らなければ、願いは叶いませんよ」

「わかっている……」

わかっているけれど、帰るのがとても怖かった。

もし、夢鏡でみたことが現実になっているとしたら？

明華はそれがとても恐ろしかった。

「もう少しだけ……いさせて……」

「そう……ですか」

雲隠はそれ以上は何も聞かなかった。そして、余分なこと何一つ言わなかった。

ただ、ひとことだけ明華に告げた。

「願いは約束どおり叶えましょう」

しゅる、と衣擦れの音がし、雲隠がその場から去っていくのを背中に感じながら、明華はほっとしたように小さく息をついた。

「帰りたくない」という明華を、雲隠も学然も無理やり追い返すようなことはしなかった。

「好きなだけいたらいい」

学然はそういうと、何かと明華に世話を焼いてくれた。

ここに数日滞在するうちにわかったのだが、この家の一切を取り仕切っているのは、実は雲隠ではなく、学然だった。

つまり、明華がここに転がりこんだ日に、気を利かせて香を焚いておいてくれたのも、毎日食事を作っているのも、すべて学然だったのだ。

何より驚いたのは、棚の上に敷かれていた絹織物にあつた刺繍まで学然作だというのだ。

「あなた、何者？」

「だから…しもべ」

学然はククツと愉快そうに笑った。

> i 3 8 4 1 4 — 4 8 0 8 <

「俺がやらねえと、あいつは何もできないからな」

明華は不思議そうに窓際の雲隠を見やった。彼は陽だまりの中で、半分うとうとしている。手には書物を持っていたが、先ほどからまったく頁はめくられていない。

「仙人さまなんだから、何でもできるんじゃないの？」

「残念ながら家のことはさっぱりだな。大体仙人だったって、何でもできるってわけじゃあねえだろうからなあ」

「そうなの？」

「明華にだって、得手不得手はあるだろ？」

こくりと頷く。

「仙人だつて同じつてことだ。特にあいつは……不器用だからな。いろんな意味で」

ふうん、と明華はなんだか納得したような気になった。

「でも、楽器を奏でていたのは……雲隠でいいのよね？」

そういえば、ここにたどり着いた日の夜、雲隠にお礼を言ったけれど、雲隠は自分が二胡を奏でていたことを認めたわけではなかった気がする。

ひよつとしたら……まさか学然が？

内心、それはありえないような気がしつつも、家事やら刺繍やらを得意とすることが発覚した今、さらにある意味期待を裏切るような状況になるような気がしなくもなかった。

「ああ、そうだな。あいつ、二胡だけはうまいからな」

だが、あっさりと、そのように学然は答えた。そうして意味ありげに笑った。

「あなたは弾かないの？」

「ガラじゃない」

そういう自分はどうなのだ、と問われて明華は胸を張った。

「弾こうと努力はしたわ」

「努力しても弾けなかつたんなら、俺と同じだ」

鼻の頭をつんと押しやられる。

「失礼ね。努力したのじゃないのとはえらい違いだわ」

へーへーと学然は笑いながら、茶をすすった。

「わたし、雲隠の二胡、好きよ」

「そうか……」

ふつと目を細めて、学然は微笑んだ。

それまでの軽い調子の彼とはまったく異なる、とても大人な雰囲気、明華は思わず顔を赤らめる。

それを知つてか知らずか、学然は明華の頭をぐりぐりとなでた。

「ありがとな」

「？」

礼を言われる理由が、明華にはまったく理解できなかったが、学然はその理由を言っではくれなかった。

その晩、寢床に就いたものの、明華は眠れずぼつと天井を見つめていた。

ここに來てから、こういつた状態が続いてる。

どうしても、あの夢鏡のことを思い出してしまつのだ。

眠ればまた、ここに來た夜みた夢を再び見てしまつかもしれない。見たくもないのに。

> i 3 8 4 1 6 — 4 8 0 8 <

ゆえに、目を閉じることでもできず、明華は深く息をついた。毎晩この繰り返しだ。

と、そこに今晚も二胡の音色が微かに聞えてきた。

いつもであれば、その音色が眠りにつかせてくれるのだが、昏間の学然の話が気になり、明華は起き上がると、薄手の衣を上羽織り、部屋を出た。

二胡は別の部屋から聞こえてきたのだとばかり思っていたが、どうやら屋外から聞こえてきているようだった。

あたりを見回すが、人の気配はしない。

ひっそりと静まり返った邸。

離れの部屋には微かに灯りがともっているのが見えた。窓に映し出された姿は学然のものだ。

見かけによらず意外と彼は勤勉で、夜更けになつてもこうしてひとりで本をめくっているのだと、雲隠が笑っていたのを思い出す。

だが、彼のそばに雲隠はいないようだった。母屋にもいそうな気配はない。

ここいらに彼ら以外に人がいるとは思えなかつたから、あの音色の主は雲隠なのだろうが、肝心の彼はどこにいる？

先ほどまで聞こえていた二胡の音は、気づくと聞こえなくなつて

いた。

もしかしたら、風向きによって聞こえたり聞こえなかったりするのかもしれない。

そんなことを思っているうちに、再び二胡の音色が聞こえてきた。部屋の中で聞くよりもよりはっきりと聞こえてくる。

明華は音のするほうへと足を向けた。

門をくぐり、外へ出る。

真つ暗な道はちょっとばかり怖かったけれど、それよりこの音を奏でている彼を見てみたいという好奇心のほうが勝っていた。

彼女はおっかなびっくり夜道を進む。

ここに来たときは朔の日だった。あときは、本当に真つ暗でも見えなかった。それに比べれば、今日は頼りないとはいえ月が姿を見せている。

明華は竹林の中にできている、人ひとり通れるくらいの細い道を辿った。ここに来るときは、ただただ恐ろしさだけがいつぱいだった竹林だが、こうして月明かりの下で見ると、また違った印象を与えた。

真つ青な葉に、月の薄明かりが落ちている。すつと風が吹けば、さわさわと優しい音を奏でた。その音は聞こえてくる二胡の音色と相まって、より趣き深さを与えている。

明華は心が澄んでいくのを感じた。

何度か立ち止まり、そのたびに空を仰いだ。

今までこうしてゆっくりと自然と、いや、己と向かい合ったことがないような気がした。

そうして、水が湯に変わるくらいの時間歩き続けただろうか。

少しばかり開けた空間にたどり着いた。

そこには、小さな泉があった。滾々と水をたたえた泉のほとりには雲隠がいた。

彼は月明かりの下で、一人二胡を奏でていた。

その儂げな横顔はまるで泣いているかのようだった。

高く、低く、悲哀の想いがこめられているかのような二胡の音色。心を強く揺さぶられるような、悲しい音色。

雲隠は何を想ってこのような曲を奏でているのだろうか……。近づいてきた明華に気づき、驚いたように雲隠は顔を上げた。

「明華……」

彼は二胡を奏でる手を止めて、すつと人差し指で明華の頬に触れた。雲隠の行動で、明華は初めて自分が涙を流していること気づいた。

「あなたは……とても感受性が強いんですね」

慌てて頬を擦ったが、涙は止まらなかった。

なぜ……だろう。なぜこんなにも心をゆすぶられるのだろう。

（ああ……そうだ）

淋しい、という声が聞こえてくる。この人の奏でる二胡の音からは。

一人でいたくないと。

一人で悲しみの中に、これ以上いたくないのだと。

明華が夢鏡の中で思ったことを、強く、強く感じるのだ。

（まさか……雲隠も？）

雲隠も同じ想いを抱いているのだろうか。

いや、そんなこと、あるはずはない。

明華は己の考えを否定する。

雲隠の傍らにはいつだって学然がいる。彼がいつも彼を支えているように見える。軽口を叩いていながらも、それでも、学然が雲隠を見る目はとても温かく優しい。そして、雲隠もまた学然を信頼しているように見える。

だが この音色は、深い悲しみを知らずして出せるものではないように思えた。

明華はもう一度ぐいと涙を袖でぬぐった。

「ね……雲隠」

雲隠は傍らの石を指差し、明華に座るよう勧めた。明華はちよこ

んとそこに腰を下ろすと、雲隠の横顔を見上げた。

> i38417—4808 <

やはり、ここに来たとき感じたように、雲隠の横顔はとても悲しみで満ち溢れているように思えた。

そういえば、ここに至って明華は思い出す。

この竹林にたどり着いて、雲隠と出会ってからまだそんなに時間は経っていない。だが、その間にも、彼が今回のように一瞬、とても悲しげな顔をするのを何度か見ているような気がした。

「ね……聞いてもいい？」

「わたくしが答えられることなら……」

「わたし、ときどきあなたがとっても悲しそうな感じがするの。これは気のせい？」

雲隠は瞠目した。

「ああ、いけませんね……ほんとうに……」

しばらくの間のこと、自分を責めるように雲隠は言った。

「あなたにまで悟られてしまうなんて……わたくしは……」

「雲隠……？」

雲隠は双眸を閉じた。

少しうつむき、次の発すべき言葉を探しているようであった。そのため、明華は何も言わずに、じっと彼が言葉をつむぎだすまでじっと待った。

ぼこぼここと、泉の水が湧く音がとても大きな音のように思えるほど、静まりかえった空間で、明華は辛抱強く雲隠の言葉を待った。

そうして、しばらくした後、雲隠はおもむろに口を開いた。

「わたくしは本当はここにあっつてはいけない者なのです」

彼の言葉は唐突だった。

雲隠は二胡を傍らの木へと立てかけた。

そうして、月を仰ぐ。

「どういう意味？」

彼が言わんとしていることが、明華にはまったくわからない。

それまでの話といたいたいどのような関係があるのかさえ、わからなかった。

「わたくしは生きていてはいけないのですよ……本当は」

（本当は？）

生きていてはいけない？

そんなことをいつたい誰が決める？

雲隠は誰に対してそう思っているのだろうか？

学然？

いや、そのようには見えなかった。

先ほども思ったが、少なくとも、二人の間はとても良好に見える。彼らはお互いを信頼し、そして支えあっているように見える。そしてこれはおそらく間違いではないだろう。

では、いつたい雲隠は誰に対してこのようなことを思っているのだろうか？

いや、違う……。

「誰に」ではないのかもしれない。

ひょっとしたら雲隠は……

「雲隠は……生きてるのがいや？」

はっとしたように、雲隠は顔を上げた。

「生きていてはいけない、じゃなくて、生きていたくないんじゃないの？」

そうだ。きつとそうだ。

だって、人が生きるのに、誰かに許可を得なくてはならないなんて、おかしい話だ。

雲隠は「生きていてはいけない」のではなく、「生きていたくない」のだ。

だから、あんなにも悲しそうな顔を……する？

「どうして……？」

その問いには、雲隠は答えられなかった。

ただ、湖の水面に揺れる月光に目を細めた。



「もつと前向きに生きていたら……そう思つのですが……。いえ、前向きに生きていられたら、わたくしはここにはいないでしょうね」

「そう……なの？」

「ええ、そうですよ」

明華には、いまいちここがどういふ場所なのかいまだによくわかっていなかった。

そう素直に言つと、雲隠は少し驚いたように明華の頭をなでた。

「ここにくるには……少し早すぎたかもしれませぬ」

「？」

「でも、あなたに道が開けた、というのなら、きっと意味があるのでしょう」

雲隠は二胡を手にする。

そうして、再び音を奏で出した。

優しくも悲しいその音は、澄んだ夜の空気に溶けていった。

## 第5章

「雲隠は？」

ここに来てから十数日が過ぎようとしていた。

この日、面白いものを見せてやると学然に言われて、明華は彼の部屋を訪れていた。

> i38418—4808 <

彼の部屋には所狭しと書物が並べられている。

伝奇物から史書、兵法書など、まるで統一感がない。彼いわく、気になったものを片っ端から集めていたら、このような状態になってしまったんだそうだ。

中には歴史的にも価値がありそうなものもおいてあった。

「あー、あいつはいまちよっと取り込んでるんだ」

部屋の片隅でござござとなにやら探しながら、学然は返事をした。

「お客様？」

「まあな」

何となく学然の歯切れが悪い。

「わたしみたいに来た人？」

「まあな……」

なにやら見つけて引っ張り出してきた学然は、明華と目を合わせようとはしなかった。

(あやしい……)

明華は「ふうん」とだけ言うと、かまわず母屋へ行こうとした。

「おい、嬢ちゃん！ だめだったら」

「どうして？」

「どうしてもこうしても……」

「別にかまわないでしょ」

「そういうわけにもなあ……」

おかしい。

学然は何かを隠しているように見える。

「別に邪魔はしないわよ。それよりお客さまにお茶は出したの？」

雲隠には無理でしょ？」

「そうなんだけどなあ……」

「出していないのね」

うーと、学然はうなっている。

「いいわ。わたしがお茶を出してあげる！」

ぱたぱたと明華は駆けていく。

「あ、おい、嬢ちゃん！」

慌てて学然が後ろから追いかけてきた。それをするりと交わして、

明華は母屋への戸を開いた。

「！」

突然の闖入者に、雲隠は驚いたように二人見た。

そうして、明華と、彼女に続いて入ってきた学然を見て、ふうと

小さくため息をついた。

「学然……」

「し、仕方ないだろう」

俺は止めようとしたんだ、とぶつぶつと言いつつ、学然を、雲

隠は軽く睨みつける。

「別に学然を怒らなくたっていいじゃない。わたしはお客さまに

お茶をいれにきたただけなもの」

「明華……」

ふと、聞き覚えのある声があった。

がたり、と雲隠の向かいに座っていた二人が立ち上がり、ゆっく

りとこちらを振り向く。

二人の顔を見て、明華は目を見開いた。「お父さん…お母さん…

？」

両親は何も言わず、明華を見て、目を細めた。

じりりと、明華は後ずさった。

まさか、自分を連れ戻しに？

いや、そんなことはないはずだ。

だって、自分は家を出るとき、どこに行くとは告げていない。明華がここに来ていることは誰も知らないはずだ。

明華は自身、ここにたどり着けるとは思わなかったのだから。ここに来たのは、本当に偶然なのだから。

なら、どうして二人はここにいるのだろうか？

「いやよ。わたしは帰らない！」

「明華……」

「お二人とも、あなたのためにここにいらっしやったのです」

「雲隠さま！」

二人は同時に雲隠の言葉を遮ろうと叫んだ。

「わたしの…ため？」

決してありえない理由に、明華は両親をまじまじと見つめた。父も母も明華からスツと視線をそらす。

( やっぱり…そんなこと… )

「ありえない…」

「なぜ？」

「だって…わたしは……」

弟よりもすべてが劣っていて……だから……。

「どうせわたしを連れ戻しに来たのでしょ！　そしてまたあそこに閉じ込めて、あのコと比べるのよ！」

「明華」

「わたしは、わたしはあのコと比べられるためにいるのよ！」

「いいかげんになさい」

小さな痛みが左頬に走る。

突然の雲隠の行動に、周りのものは啞然とした。

これまでの物静かで、微笑みを湛えていた彼からは想像がつかない行動だった。

学然もこれには驚いたらしく、あんどりと口を開いている。

「お父上とお母上のことがされようとしていたこと、知ってもなお、

そのようなことが言えますか!？」

啞然としている明華に、雲隠は告げる。

「お二人がここにいらしたのは、娘さんの命を救うためです」

（娘？ 命…？）

あまりにも唐突過ぎる言葉。

明華の頭の中は、ぐるぐると雲隠の言葉が回る。

（どういう…意味？）

いったい何のことを言っている？

雲隠が言ったことは…誰のこと？

明華はわけがわからず、両親と雲隠を代わる代わる見た。

しかし、両親は視線をそらしたままで、何も答えてはくれない。

「お二人の娘さんは、生まれたときから病に侵されていました。もとも長くは生きられない、そう医師から告げられていたのです」

明華の朦朧とした頭の中に、次の雲隠の言葉が入り込んできたが、やはり理解はできなかった。

（誰の……こと？）

二人の娘？

生きられない？

「明華、あなたのことです」

はつきりと告げられた言葉。

「わたしは、死ぬの？」

「ええ」

ふらりと視界が揺れた。

身体に力が入らない。

「ご両親は」

雲隠は夫婦の顔をちらりと見やり、そして、決意したように告げた。

「己の命をあなたに分け与えたい、と、そう願うここに来たのです」

「…」

両親をもう一度見る。絶えかねて、母が泣き出した。父が、そっ

と母の肩を抱く。

明華はここにきて、ようやく悟った。

それでは、あの金庫に貯めてあった金は……。

「あなたのためです」

明華の思考を読み取ったかのように、雲隠は告げた。

「すべてはあなたのため。あなたを生かすため」

わっと明華は声をあげて泣いた。

自分の愚かさを思い知った。

何も自分はわかっていなかった。

両親の心も、そして自分自身のことさえも。

両親は弟のことしか考えていないのかと思いつ込んでいた。自分は愛されていないのだと。自分などいてもいなくてもかまわないのだと。

なのに、両親は自分をきちんと見ていてくれた。それどころか自分たちの命を差し出してまで明華を救おうとまでしてくれていたのだ。

「あなたは言いましたね。幸せになれる世界に行きたい、と。あなたの願い、ここで叶えて差し上げましょう」

明華のもとに、雲隠が歩み寄ってきた。そうして二つの玉を差し出した。

手のひらにすっぽり収まるくらいの大きさのそれは、とても美しい色合いをしていた。

一つは晴れた日の夕焼けのような色。一つは晴れた日の雲ひとつない空の色。

「のぞいてごらんなさい」

言われるがままに明華は玉を覗き込んだ。

スウと玉に引き込まれるような感覚に襲われる。

逆らいようがない強い力に引き寄せられる。

それと共に、次々と浮かんで消えていく場面。

(これは…)

「あなたの未来」

夕焼け色の玉では、家族と共に笑っている自分。しかし、それはやがて過ぎ、土の中に横たわる両親が映った。

空色の玉でも、やはり家族と共に笑っている自分が見えた。だが、これもやがて過ぎ行き、土の中に横たわる一人の人間が映し出された。

それは 自分自身だった。

「これが、わたしの…」

「そう、未来。あなたは、どちらを選びますか？」

先ほど、雲隠が告げた言葉と、この玉に映し出されたことが結びつく。

夕焼け色の玉を選べば、自分は永らえることができる。だが、それは両親の命を分け与えられるからだ。

自分に残りの命を分け与えた父も母も、本来定められた寿命をまっとうすることはなく、明華に分け与えた命の分、寿命は縮められてしまう。

空色の玉を選べば、自分の命はあと数年。やがて、自分の命は燃え尽きてしまうだろう。これからの日々を、やがてくる「死」を意識して生きなければならぬ。

明華にとっては、どちらも恐ろしい未来だった。

人間、誰しも自分が死ぬのはいやだ。だが、他人の命を引き換えにしてまで、永らえることもいやだ。

「明華、こちらの玉を選びなさい」

それまで黙っていた父が、夕焼け色の玉を指差した。

「こちらを選べばお前は生きていける。私たちはそのためにここにいるのだから」

「明華…」

母は今にも泣きそうな顔をしていた。

「私たちはお前に生きてほしい」

その言葉が、明華に決意させた。

明華は、大きく息を吸うと、一步前へと進み出た。

「決まりましたか？」

「ええ」

大きくうなづく。

「わたしはこちらを選ぶわ」

明華が手にしたのは、空色の玉だった。

「明華！」

悲鳴にも似た声と共に母がその場に崩れ落ちる。

そんな母を父が支えた。

「なぜこちらを？」

表情一つ変えずに、静かに雲隠は訊ねた。

それは、まるで明華の選択を予見していたかのようにだった。

明華は静かに双眸を閉じた。

たとえ両親の命を分け与えられて、己の寿命を伸ばしてもらったところで、さきほど見せられたものが現実となってしまうのなら……。

きつと、自分は自分自身を許すことができないような気がした。

罪悪感と、後悔と　悲しみに埋もれてしまっただろう。

そんな日々を生きなければならぬのなら、自分は……。

「わたしは残されたときを大切に生きていたい。家族のもとで」

明華はにっこりと笑んだ。

> i 3 8 4 1 9 — 4 8 0 8 <

「あなたが思っている以上に、己の寿命がわかっていいる中で生きていくのは辛いものですよ」

「　　尽きない年月を生きるのも辛いと思うわ」

明華の言葉に、雲隠がはっと顔を上げた。

「わたしには家族がいるから大丈夫よ」

明華は満足そうに笑った。

その笑みは、ここに来てから明華が見せた心の底からの、真の笑顔だった。



それから数年後。春の足音が聞こえ始めた、心地よいある日のこと。

明華は静かに息をひきとった。

大切な家族に囲まれて。

「幸せになりたい」

雲隠に告げた彼女の言葉が、本当になったのかは彼女にしかわからない。

だが、彼女は最期のその瞬間、家族に笑いかけたのだという。

## 第6章

「おまえさ……まさか……」

「さあ……どうでしょう?」

雲隠の指先に止まっていた白い鳥が、ぱつと飛び立った。

雲隠は静かに微笑んでいる。

「少なくとも、彼女の笑顔は心からのものだと思いますけどね」

「ま、そうなんだけどな」

学然はうーんと、頭をかいた。納得がいかないようすだ。

「あの時、この結果を望んだのは彼女です。わたくしは選択肢をきちんと用意しましたよ」

そう、あの時、己の命が残りわずかであることを知ったのにもかわらず、かの少女は強い心で、残りの命を大切に生き抜くことを選んだ。

生きながらえる術があつたのにもかかわらず、だ。

両親の願い すなわち、彼女が少しでも生きることができると、二人の命を削ることを彼女は望まなかった。

「彼女は幸せですよ。愛する者と最期するときまで共にいられたのですから……」

雲隠は二胡に手をやる。

そうして、おもむろに奏で始める。高く、低く。泣き声にも似た悲しい音色は、竹林へと吸い込まれていった。

> i 3 8 4 2 0 — 4 8 0 8 <

## 第6章（後書き）

第1話はこれで完結です。

が、このあとも、雲隠と学然の物語は続きます。

もしよろしければ、第2話以降もお楽しみくださいませ。

## 登場人物紹介〜第一話〜

ミンファ  
明華

> i 3 8 3 7 5 — 4 8 0 8 <

商業都市悠春に住む。

街でも有名な商家である蘭家の娘。

気が少しばかり強い。

弟ばかりに目をかける両親に対し反発し、家を飛び出して、願いをかなえてくれる仙人を訪ねて竹林へやってきた。

家族構成：父、母、弟

年齢：10歳

裏話

「竹林奇譚」最初のお話。

登場させるならば、かわいい女の子がいいと、明華の登場となりました。

名前はいつも「おと」と「字面」で決めています。

中国語の辞書を引きながら決めています。中国語に詳しくはないので、結果的に、もしかしたら中国語ではとんでもない意味になっている可能性も捨てきれません。

そうなっていたら……ごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3617o/>

---

竹林奇譚 第一話 選択した行く末に待つもの

2012年1月5日01時50分発行